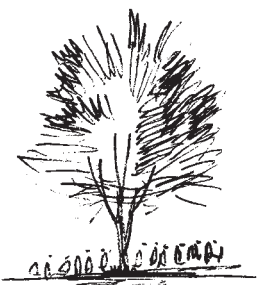


ひかりのこ

光の子



No.181 2017.9.20

●年間聖句 光の子として歩みなさい。(エフェソの信徒への手紙5章8節より)



「秋 声」

表紙絵・中島由起子

※今号の俳句は、休載します。

発行／社会福祉法人 光の子どもの家 TEL／0480-72-3883 FAX／72-6649 振替／00130-1-128022
編集／光の子 編集委員会 e-mail:hikarinoko@ceres.ocn.ne.jp 〒349-1155 加須市砂原277 印刷／㈱エル・アートデザイン
HPアドレス／hikarinokodomoie.com

第三者評価

理事長 菅原 哲男

児童養護施設は、家庭に何らかの事情が発生して、家族と共に暮らすことが出来なくなった子どもが、暮らすための場所としてつくられた。

家庭に何らかの事情が発生して、その家庭にすることが出来なくなったという最初の単純さで考えれば、いられなくなった家庭という場所と経過する時間に出来るだけ相似な場所やルール、暮らしが重なるものが子どもにとっていいはずである。

最近、光の子どもの家創立以来二度目の第三者評価を受けた。三年毎に受けることが義務づけられているものである。三年前にも同じように感じ思ったことだったが、児童養護施設光の子どもの家は、彼らが失った場面や時間とつながって近似した機能を果たしているだろうか。

何よりも、こうした第三者評価を受けなければ存続する価値のないものが児童養護施設なのだろうか、と強く思ったことであった。出来るだけ普通でなければならぬ暮らしの中に、最も非日常的な第三者が評価に来るということの異常さである。

三年ほど前に、他の施設から聞いたことだが、とりわけ異常だったのが、子どもたちとみんなで食事をしていてテーブルに隣り合っ

て第三者が立っていたということ。当たり前のようにあったとのことである。これは異常そのものではないだろうか。監視されながら食事をするというのは刑務所ぐらいのものだろう。

ここに来た、あるいは来る子どもたちは犯罪など犯して、懲罰を受けに来ているものでは断じてないのである。むしろ心ない大人たちによって傷つけられ、命からがら逃げ込んできた被害者なのである。被害者を監視すれば、マイナ

ス感情をもたらずことは当然で、それこそどんな言い訳をしても犯罪的である。一般に子どもたちが拒否的になることに、監視されるということがある。学習時間などに騒いでいると、どこからともなく現れた職員に叱られることが児童養護施設には珍しくないだろう。

この第三者評価もいろいろ事情があつてのことだが、十五年ほど前に、全国的に施設の不祥事に揺れた誇らしくない時期があつた。カネと性的な逸脱などが不祥事として報じられたことがあつたのである。

かつて、施設の荒れをどう収め

るかなどについて話をしにいったことがある。どんなときも言い訳を大人がしている間は事態は収まらないことを話した。

何とか傷つかず安価に事態を収めようと画策することがよくある。またそういう性癖が私にもあるのだ。

そういう性癖が私にもあるという自己認識から始めないと治まらないのだ。そうこうする間に、施設運営最低基準に第三者評価が入り、必須の義務となったのがこの制度の源である。

やはりお役人は優秀である。社会福祉に関する法律に、評価を義務として入れれば遵守しようとすることを周知していたのである。

しかし、なんと言っても、児童養護施設は子どもたちのための子どもの施設である。可能な限り子どもたちに胸を張れないようなことどもを乗り越えるために、何よりも子どもたちに迷惑をかけないで決して安くはない経済を支払ってでも、第三者評価をおし頂く以外に道はなさそうである。子どもたちの不幸を飯の種にしているのだから。



傘寿のお祝い

老健施設みゆきの丘施設長 仙道 富士郎

「傘寿^{さんじゅ}」という言葉をご存じだろうか。還暦、古希、喜寿、米寿などと比較すると、あまり人口に膾炙^{はいしあ}されていないが、傘の字を分解すると八十となることから、八十歳のお祝いを意味する。これまで「光の子」で

何回も触れたが、私は秋田県の田舎の育ちで、卒業した中学校は、今はもうなくなってしまった西馬音内中学校である。その中学校を卒業した数え八十歳の同級生約四十名が、その昔、山内村と呼ばれていた、山深い地区の温泉宿に集まってのお祝いである。私はまだ毎日働かせてもらっているが、皆

悠々自適の身であるようで、日曜日の宿泊であった。料金が安い曜日なのであろう。なんと、温泉の地元の山内中学校の傘寿のお祝いも同じ日に同じ温泉場で開催されていた。大浴場に入っていくと、

同級生の懐かしい顔のほかに、故郷訛りの言葉を話している同じ年恰好の集団がいた。山内中学校卒業の傘寿のお祝いの人たちなのであろう。

古希のお祝いの時の事はよく憶えている。秋田の故郷からはかなり離れた岩手県の花巻温泉で開催されたのだが、学長の職を終える僅か前の頃で、新幹線の花巻駅からなにかあわただしく帰路に付いた。花巻駅で、新幹線から降りたという中学校同級の初恋の人に、学長を終わったら、シニアボランティアで南米のパラグアイに行くのだと誇らしげに語ったのだが、彼女はあまり興味を示さず、「また元気で会いましょうね」と言い残して、私とは反対方向の電車に乗っていった。それ以来彼女とは会っていない。彼女は同級会皆出席だったのだが、今回のお祝いの前の喜寿のお祝いに出席しようとしていた矢先に脳卒中で倒れてしまったのだ。

それにしても、同級会に出席する人たちの顔ぶれは、大体いつも同じだなあと思う。「あれ?——さんは?」というと、大体は病氣中である。亡くなる人も増えてきた。前回の喜寿のお祝いの時に、二日目は観光で、昼食は、有名な

稲庭うどんの店であったが、同席して、「もうちょっと食べようか」と二人でお代わりをして稲庭うどんを食べたI君の名前は、幹事から報告された、喜寿から今回の傘寿までの間に鬼籍に入った人たちの名簿のなかにあった。年をとっても愛くるしかったI君の表情が思い出され、辛かった。

数え八十歳になつて同級会に参加できる人間は皆幸せなのである。参加した四十名の人たち全員が自前で傘寿のお祝いに参加したわけではあるまい。息子、娘、嫁などに恵まれているから、「行つて来たら?」と費用を負担してくれて、参加した人も多いのではないか。話題は当然ながら自分の病気の事が多く、勢い、一応医師免許証を持つている私は俄か病氣コンサルタントになるのだが、無責任なことも言えず、冷や汗ものである。ただ、皆の表情はおしなべて明るく、八十歳にしては闊達であった。何しろ、二次会が終わったのは、午前様に差しかかるときであった。のんびり兵衛の秋田県人であるにしてもである。

最も強く印象に残っているのは、県の収入役を経験した人で、脳卒中で倒れた後、しばらく同級会には出席していなかったが、今回車

椅子で参加した人である。朝食の終わった後に、話を聞きに彼の隣の席に行くと、県庁時代の話を熱っぽく語ってくれた。彼からは、そのあと、傘寿のお祝いの時を懐かしむ暑中見舞いが来た。印刷されたものだった。みんなに送ったのだろう。

米寿のお祝いの会開催の話にもなったが、心なしか熱のこもった話には至らなかった。「自分は八十八まで元気に生きて、お祝いの会に来れるかなあ?」との想いが皆の脳裏をかすめたのだろう。皆の表情が一瞬曇ったような気がした。こんな時私はいつでもおせっかい屋である。同室の東京在住の二人に、米寿の前に東京で一回会を開いたらどうかと提案した。東京開催なら、横浜に住む初恋の人は、片麻痺があつても、参加できるのではないかと瞬時思いを巡らせたことは白状しなければなるまい。



「共育ちカンガル―日記」

(45) 父と娘

近藤みちる

何を隠そう、幼い頃の私は大の「パパっ子」だった。自宅で質屋を営んでいた父はいつも家にいて、仕事の合間を見つけては、私や姉の遊び相手をしてくれた。父の運転するカブ（五十ㄥバイク）の後ろにちょこんと乗って、父の行く先々について回るのも好きだった。故郷は谷合いの緑豊かな町で、父は自分のお気に入りの景色を見せるために、よく私たちを連れ出してくれた。

文学や古代史にも親しんでいた父は、折に触れ俳句や万葉集、古事記の神話などを、私たちにもわかるように易しく、そしてロマンチックに話して聞かせてくれた。店を閉めた後に文学仲間と開く、夜の句会や勉強会にも同席させてくれたし、奈良の史跡巡りの旅にも、毎年のように連れて行ってくれた。

父が私に見せてくれる世界には、幼い好奇心をくすぐるきらきらとした輝きが溢れていて、私は父という窓を通して、未知なる広い世界に間接的に触れていたのだと思う。

そんな私も母となり、小学四年生になる一人娘の優希は、近頃すっか

り「パパっ子」になった。どうやら優希は科学が大好きな理系女子で、同じく科学好きな理系男子のパパと、すっかり意気投合したようなのだ。将来の夢は気象予報士、という優希。一方のパパは子供時代、宇宙飛行士に憧れていたという。

そんな二人、暇さえあれば科学図鑑を広げて何やら盛り上がり、週末には連れ立って科学館や天文台を巡るようになった。夏休みには二人で、JAXAや気象庁の見学ツアーにも参加した。

興味ある分野はとことん掘り下げていく優希の飽くなき知的好奇心に応えようと、パパは労力を惜しまない。小まめに科学誌をチェックして、日進月歩の研究動向や最新の学説を仕入れているようだ。そんなパパを優希は心から尊敬し、学校で先生や友達を相手に「優希のお父さんは、宇宙のことも気象のことも、誰よりも詳しいんだよ!」と、パパ自慢をしているらしい。

思い返せば十年前、待望の娘の誕生を誰よりも喜んだのはパパだった。だがその二年後、優希に発達障害の

可能性があると初めて告げられた際、誰より深く傷ついたのもまた、パパであった。二十年近く傍らにいる私に、パパの涙を見たのは、後にも先にもこの時だけである。丸二ヶ月間、とことん落ち込んだ末に、パパはようやく立ち上がり、私にこう言った。「言葉は悪いかもしれないけど、俺の中で優希は一度死んだ。今、やつと本当の優希に出会えたんだと思う。」

魂からの言葉だと思った。そこには、ありのままの優希を受け入れたからこそ、穏やかで清々しい眼差しがあった。難しいことはわからないし、先のことなど見通せない。とにかく、優希の笑顔が消えないように育てていこう。それが私たちの立てた、ただ一つの誓いだった。こうしてパパは、その誓いそのままに、優希の自慢のパパとなったのである。睦まじいパパと優希を見てみると、かつての自分と父のことを思い出す。子供にとって母親は、絶対的な安心と安全を保障する港と言えるのかもしれないが、父親は、その港から子供を冒険の航海へと誘う、羅針盤のような存在なのかもしれない。

パパは時折言う。「こうして俺と二人でお出かけしてくれるのも、いくつまでかな。」

確かに、あんなにパパっ子だった私でも、中学生になると手のひらを

返したように、父との間に距離を置くようになっていった。生意気な口答えばかりしていた時期もあった。思春期は、早かれ遅かれどの子にも訪れ、葛藤の末、やがては自分の羅針盤を手に、自ら港を発つていくものなのである。あの頃の私も、そしてきっとパパも、そうだったように。かくして私は親元から独り船出を果たし、社会の荒波の中で愛するパパと出会い、家庭という新たな港を共に構えたわけである。だが今、私の手の中にある羅針盤は、どうやら父の羅針盤にそっくりのようなのだ。この歳になって、もう一度古事記や万葉集を読み直してみたいと思うようになったり、奈良の史跡を歩いてみたくなったり。読んだり書いてみたりもやはり好きで、理系の夫に染まることなく、生粋の文系女子を堂々貫いている。正直に言えば、毎号このカンガル―日記を書きながら、一番最初に読んでもらいたい相手は、実は父だったりするのである。

「父と娘」とはそういうものの、なのだとすれば、優希は生涯、理系女子を貫くに違いないと私は思うのである。

山の日の

山を仰いで父子なり

みちる

今年は、終戦から七十二年が経ったとのことである。

私にとつての終戦は、小学校の三年生の時であつた。いや、小学校ではなかつた。あの頃は国民学校と言つていた。

もう、七十二年も経つてしまつたのだろうか。

あの頃のこと
は、今でも、いろいろと思ひ出せる。

中島 睦雄

あ の 頃

それまでは、まさか日本が戦争に敗けるとは思つていなかった。必ず勝つんだ、と教えこまれていたのだから。

今でも覚えて
いる。

鬼畜米英
一億一心、
火の玉だ
神風が吹く

といったような言葉を、当時の時代風潮として教えこまれていたのだろう。

したがつて、日本は、戦争に敗ける筈はなかつたのである。

しかし、現実の生活の中では、案外恐ろしい体験もしていたのだつた。

東京の上空襲の夜は、南の空が赤く染まっているのが見えた。ただ、それが、ものすごい恐怖感という程の感じではなかつた。

又、別の日には、アメリカのB29爆撃機が、大編隊で、夜の利根川の上を、西に向かって飛行していった。

みんなが外に出て、上を見上げていた。時々高射砲の音がしたが、弾丸が飛行機まで届かなかつたらしい。

そんな頃の国民学校三年生の私たちは、いつもの様に、近所同士の班を作り、上級生が中心になつて学校へ行つた。

ただし、授業中に、敵の小型の飛行機、当時グラマンと言つていたが、これが低空で飛行してくると、みんな一斉に下校させられた。

飛行機が近付いたら、竹藪でも何でも良いから逃げ込んでしまえ、と教えられた。

もし、爆弾が近くに落ちたら、両手で目と耳をふさいで、地面に伏すように、とも教えられていた。その様な頃になると、戦死する人達のニュースも伝えられた。

学校の廊下あたりだったと思う

が「英霊室」というのがあつて、戦死された方々の写真が飾つてあつた。そこを通る時は、子どもたちも手を合わせ、頭を下げた。

そう言えば、関連した歌を思い出す。

必勝祈願の墓参り

みんなで摘んだ花束を

英霊室にささげたら

次は君等だわかつたか

すっかりやれよ

頼んだと

胸に響いた神の声

そんな頃になると、私たちの学校へも、疎開してくる生徒が何人も来ていた。

東京で両親とも空爆で亡くなつたという子もいた。

子どもの私たちには、戦争の全体的な状況はわからず、身のまわりの状態だけを、感じるだけであつた。

そして、八月十五日である。

お盆の日であつた。その日、正午に玉音放送を聞いたが、意味は解らなかつた。

「日本は、戦争に敗けたんだ」と、大人から聞いた。敗ける筈はなかつたのに。

そうなつてみると、そのうち、海外での悲惨な戦争の話が伝えら

れてきた。日本兵の、戦う前に食べ物がなく、飢え死にをしてしまつた人が多数いたとか、特攻隊のことや飛行機や軍艦の圧倒的な差などが知らされてきた。

そして、国のために、若い命を捧げたたくさんの方々の戦没者に対する残された者の使命。

この様な事が真剣に考えられ、行動に移されていたようである。

私の父も、戦時中からのいろいろな拘りから、この戦没者に対する慰霊の心が強かつたようである。

それは、子ども心にも良くわかつた。慰霊の会とか、慰霊塔の建立などについて、熱心に関係者と協力していた。

したがつて、父の意志を継いで、私と私の子どもたちと、八月十五日、お盆の日、終戦に日に、昔の村の慰霊塔にお参りすることになっている。

これは、我が家の年中行事の一つとして、何十年も続いている。



プ・リ・ズ・ム

子どもたちの季節 牧野家

毎週日曜、教会へ向かう車中の過ごし方の変化。

- ① 下の子三人が「ごっこ遊び」。テレビドラマをまねて医者と患者、ときどき医療ミス。即席お化け屋敷、刑事もの、全体像の見えない家族ドラマ。いちばん上の高校生はイヤホンで音楽を聴いている。
- ② 大人のスマートフォンを使って音楽を聞く。運動会で踊った曲を繰り返し流し、踊る。CMで聞いたことのある曲、ドラマやアニメの主題歌、ボーカロイドの曲を大人にリクエスト。
- ③ 携帯音楽プレイヤーを使うようになった美柑。イヤホンを使い、ボーカロイドの曲を聴く。音漏れを指摘され音量を下げる。八恵と片耳ずつ分け合うことも。
- ④ 八恵が卒園生の置いていった携帯音楽プレイヤーをもらう。イヤホンを使って一人で聴くようになる。美柑は誕生日プレゼントで密閉型のヘッドホンをもった。これで音漏れ対策も大丈夫。進みゆく個別化。
- ⑤ 日向に大人のスマートフォン

とヘッドフォンを使わせる。みんなそれぞれに何か聴いていて無言。運転手がさびしくなる。

⑥ 図書館に行くたび、CDを借りてきて音楽プレイヤーの中身を充実させる子どもたち。九月末には自転車で二十分ほどのところにレンタルショップができる。自分の好きなものを見つけて、手元に引き寄せることは楽しい。幅広い年齢の子どもがいて、個別化の流れはしかたないだろう。

⑦ ……でもやっぱりさびしい。ということ、
「みんなが知っていて」「流れていたらそのまま聴きそうな曲」を探しては、せっせとスマートフォンに取り込んでいる私である。

佐藤 義岳

河のほとり 倉澤家

今年も子どもたちだけが待ちに待った(笑)夏休みがやってきました。海、山、プールに、可能な子は家庭帰省。楽しみなことや、思いで作りや、持て余した時間が強い紫外線とともに子どもたちを刺激します。

今年も倉澤家は牧野家と合同で家行事に臨み、福島にあるハワイアンズへ行ってきました。ここを選んだのにも理由があります。去年の行事で静岡県の伊豆に行ったのですが、初日は天候のため海には入れず、二日目は入れる子もいました。個人の事情で入れなかった子も。二日目の夜にトラブルが生じ三日目の予定は全てキャンセルし帰ってきたという、ある意味思い出にはなつたでしょうが、子どもたちの表情にあまりにも笑顔が少なかったことが大きく印象に残っていて、今年はそれらに左右されることなく存分に満喫できるようにと、この企画を練りました。

実現するまでに色々ありました。親族宅帰省の都合で参加できるかどうか……。前年のこともあり、なかなか行く気になれないような雰囲気醸し出す子も……。行かないと決めた高校生が、行き先やメンバーを知ってから行きたいと言いだしたり……。行事に参加できることは良いことなのですが、〇〇は参加したくない、〇〇は参加したいという言葉に100%耳

を傾けてしまえば、わがままを通してしまふのではという思いもあり、今回は本人の前言を重んじ、また、この時期の宿の予約が早い段階で満室になってしまい追加予約ができなかったことと、来年は早めに決断してほしいことを担当に伝えてもらい、今回は一名とその子の担当を残したメンバーで行くことになりました。

現地では天候にも恵まれ、水族館鑑賞、偶然の福島花火大会、そして二日間にわたり、ハワイアンズのプールを存分に満喫し、大きなトラブルもなく無事に帰ってこれたことが何よりでした。

これは私個人の高望みなものかもしれませんが、倉澤家の子どもが一家として全員参加し、皆で思い出を共有できればなという今年も残った癪りが想いを刺激します。全てがうまくいくことは非常に困難ですが、だからといってその困難から目を反らしては、実現も遠ざかり、理想も語れません。来年は全員が参加できるよう、困難なはたらきをしていけたらと思います。

黒川 健一郎

光の中で 佐藤家

まだまだ蒸し暑い日が続きますが皆様いかがお過ごしでしょうか。佐藤家では五名の子どものつれ、今年も秋田県にある職員の別荘をお借りして旅行に行きました。

今年は数年ぶりに幼児を連れて行くと言う事で、緊張と期待が入り混じる気持ちで出発しました。日程としては一日目に抱きかえり溪谷へ。二日目は海へ。三日目にプールに行き、四日目に帰宅となりました。長い車内での時間や慣れない旅に体調を崩すかもしれないと少しだけ心配していました。そんなことは無駄に終わりましたが、車酔いもせず、体調も崩さずに旅を終えた西男はすごいと感じました。海・川・プールでは期待通り大泣き。周りの子ども達もその様子を「かわいい」と見守ったり、大丈夫だと励ましたり。無理やりではありましたが、最終的には抱っこから降りて波打ち際に一人で立つ事が出来ました。周りを囲むように子ども達や職員で拍手をしましたが、当の本人は「笑い事じゃない!!抱っこ!!」と言う感じでした。

西男からすれば散々な旅行だったかもしれませんが：取り敢えず

「楽しかった?」と聞くと「うん」と言ってしまう西男でした。

田口 貴子

原田家日記

残暑厳しい折いかがお過ごしでしょうか。こどもたちは激動の(?)一学期を終え、ひとまわり大きく成長したように思います。

学期当初、新しい環境での学校生活に行き渋りを見せていた小一の花梨や年少組の奈々も、学期途中には行き渋りをみせることなく笑顔で登校・登園する姿も見られるようになりました。また、家に帰ってきて、クラスのおともだちとこんな話をした、○○をして遊んだといった話もするようになり、楽しく過ごしているんだなあと、とても嬉しく思います。

今年、高校受験を控えた瑠璃は、部活動後に帰宅し、夕食を済ませるとすぐに塾にむかうというハードスケジュールをこなし、それだけでなく、塾のない日も塾の自習室を利用したり、ダイニングで自主的に学習したりと、受験勉強に励んでいる様子がうかがえます。

こちらとしては息抜きをする時間も少なく心配ですが、学習したぶん成績が上がっていくことが嬉し

いようで、瑠璃は活き活きとした表情をしています。夏休みに入っても夏期講習や学校説明会が控え、ゆつくりすごす夏休みとはなかなかありませんが、瑠璃の頑張りをねぎらいつつ、少しは息抜きできる空間を作れるよう心がけたいと思います。

夏休みを通し、各自やるべき課題を乗り越え、さらに一回り成長した原田家の子どもたち。二学期の始まりが楽しみです

遠藤 恵里香

子どもたちの季節

暦の上では立秋ですがまだまだ暑さが続いています。いかがお過ごしでしょうか。

今年も夏季行事に行ってきました。子どもたちにとっては大イベントです。私も物凄く楽しみにしておりました。夏といえば、海、山、川と自然に触れる機会です。しかし、残念ながらこの時期の二ユースを見てみると、その中の事故が多いです。楽しみではある一方で不安がありました。出発前に台風があり、道中事故に巻き込まれたり、安全に行けるか心配でした。けれども台風も過ぎ、事故も無く無事に着くことができました。

した。

その日の夜は不安の解放からか、疲れを見せない元気な子どもたちについて行けず、先にぐっすり寝てしまいました。

次の日は待ちに待った海です。

子どもたちは大興奮です。まず高校生の検次と浮き輪なしで目標の所まで行きました。さすが高校生とにかく泳ぐのが速く、差をつけられてしまいました。

鮎子は行く前日まで、泳ぎに自信があると言っていました。当日は浮き輪をつける理由に筋肉痛を装っていました。浮き輪を取ろうとすると「筋肉痛だから!!」と連呼して周りにいた人たちを笑わせていました。

小学校の子どもも浮き輪を着けて一生懸命ついてきました。初めての海に怖がることもなく波とは逆に進んでいく姿に逞しさを感じました。幼稚園の子どもたちはライフジャケットを身に着けて浅い所で遊んでいました。一番印象に残っていたのは検次君の見事な飛び込み前転でした。皆、楽しく海で遊ぶことができ、何事も無く無事に行ってこれたのが何よりです。この夏で子どもたちは一層成長したように思います。

小泉 航

隣る人 事前面接

菅原 哲男

子どもが暮らす家庭に何らかの事情が発生して、家族と共に暮らすことが出来なくなるといふ非常事態になることがある。

そのような場合、児相などへの相談や通告によって、非常事態になつてゐる家庭から子どもを移して暮らす他の住み家を探すことになる。そのような場所の一つである児童養護施設は児相からの入所依頼を受けて入所の手続きを始める。

子どものプロフィールやここに至つた事情などを児相担当者から聴取して受け入れ担当者や家を決める。子どもの居場所として受け入れる家と担当する者が決まると具体的な受け入れの準備を始める。このとき、やつてくる子どもが同意していないか、一度は同意したが不安になり、同意を翻したくなるだろうことは容易に想像できる。そのような子どもがやつてきながら、その暮らしに不調を来すことが、これまでの取り組みでしばしばあつた。本当はこんなところに来たくはなかつたんだ、と。

そのような不調を可能な限り防ぐために、光の子どもの家では、子どもがやつてくる前に、子どもが保護されていた児相や家庭を訪問して、子どもがやつてきたらこんな大人や子どもたちと、こんな暮らしをするという光の子どもの家の情報を出来るだけ丁寧に伝え、もう一度覚悟を確認し、特に心の準備が出来るように促すために、入所前面接（事前面接）を実施してきた。

これは、当初児相の抵抗があつたが、押しきつた。どんな制度や政策、方法でもプラスやマイナスがあることは避けられない。

この頃、現場では大きなマイナスが現れ始めたようである。最初は今まで述べたように子どもに納得してもらうようにと考えて、それから始まるここでの暮らしのスタートを可能な限りよりよいものにするためだったのだ。

ところが、どんな子どもがやつて来るのか見定めようとする傾きが出始めてから月日を重ねてきてゐる。

事前面接に赴いた職員に、ねね、どんな子だった？可愛かった？等々聞くことである。これは、本末転倒なのだ。

ここにやつて来る子どもたちは出来れば……否、全力で施設入所を避けたかつたに違いない。どんなに避けたかつたにしても、避けられなかつた入所である。最後の願いも空しく絶望そのものの状態で来る。刀折れ矢が尽きた敗残兵のように。

そのような子どもに、私たちのような者でもよかつたら、一緒に暮らしませんか？と、出来るだけ見てもらい、質問も受けて同意を得てお互いに暮らしのスタートに着くように促すのだ。

もちろん児相での調査やカウンセリングなどのプロセスは困難を極めるだろう。しかし、その困難は、施設を利用せざるを得ない子どもたちの困難を超えることはない。もちろん児童養護施設での私たちののはたらくもそうである。

だから、出来るだけ彼らの状況を共感的に想像をしながら関わり方を点検し、訂正しながら関わりをよりよく展開しなければならぬ。

児童養護施設における子どもと大人の力関係は圧倒的に大人が強いし、ある時はそれが過ぎること

もある。

平成二十五年度における施設内措置児童に対する職員等からの虐待の届出が二八八件あり、半数を超える八十七件が都道府県等によつて施設内虐待と認定されているのである。一つの虐待件数について複数の子どもたちが関わつてゐることが多く、数値の不一致はそのことによるのだが、なんとしてもこれは防ぎきたいと心から願うものである。

子どもたちが家庭などにおいて虐待を受け、逃げ込むようにして施設に送られてなお、虐待から自由になれないのである。

子どもたちと施設における大人との力関係を越えていけるように、肩の位置を並べていくことが当面の課題であろう。

子どもと大人の児童養護施設への入り方から考えても大きな偏りがあることをきちんととらえ返して、真の意味での「子どものための子どもの施設」に仕切つていくことを、光の子どもの家の創立の理念にしている。その理念への道のりが未だしの感がある状況である。それを乗り越えるためにさらに研鑽を重ね、相互批判を可能にする努力を重ねていかなければならないと心から思うものである。

現場から

池田 祐子

約四十日間のとても、とても長い夏休みが終わりを迎えました。過ぎてしまえば早かったように思います。

七月下旬、子どもたちはとても楽しみに夏休みを迎えました。

海で目一杯泳いだり、山登りで達成感味わったり、普段とは違う自然に触れたり、友人宅へ出かけたり、部活動に励んだり、園庭のプールに入り浸る子、クーラーの効いた涼しい部屋でゲーム三昧だったり、と過ごし方は様々です。

ただ、幼稚園から高校まで必ずあるのが「宿題」です。内容は学年によって違うのは当然ですが、この「宿題」が職員たちを悩ませます。

すすんでやる子もいれば、促されてやる子もいます。それでもやる子は良いのですが、促されてもやらない子もいます。

「本読んだから読書感想文をやるう」と小学二年の富士雄。

「どんな話だったの？どの場面が良かったかな？じゃあ、今話してくれたことを書いてみようか。書き終わったら？どれどれ見せてごらん？あれ？ほとんどあらずじだね」と、いうこともありました。

高校二年のしつかり者の響は「七月中に宿題はほとんど終わったから余裕、余裕」と早い段階で、のんびりと夏休みを満喫していました。

やらなきゃいけないことを先にやってしまえることは本当に素晴らしいと思いました。

中学三年で受験生の拳は「拳って昨日何やってたっけ？」と、毎日の日記の宿題の時に聞いてきます。「テレビ観て、パソコンやって、バスケットやって」と、毎回同じ事を答えているように思います。



できる力もつてはいるのですが、モチベーションが無いのでしょうか。毎年ギリギリになってから始めています。

小学六年の蓮は「貴子さん、今日漢字終わった」と、担当保育士に報告し「よかったね」と言われ嬉しそう。大人がいなくても、ほとんど一人でシラツと、やってしまえる、隠れた実力派です。

中学一年の蒼士は「貴子さん、夕方宿題やるから教えて」と、解らない問題は助けてもらいながらやっていました。解らないことを素直に解らないと言えることも勇気があり、とても大切なことです。

そのように、大人に手助けしてもらいながらも、なんとか宿題に取り組む子は良いのですが、中学二年の柴太はあまりやろうとはしません。夏休みの当初は、ワークをやっている姿を見ました。

「柴太、宿題やってるね。いいね。がんばれ！」と、声をかけていたのですが、ほんの数日で、その姿を見ることはできなくなりました。当の本人はお隣の仙道家で仲の良い高校生とゲームをしたり動画を見たり……「宿題やった方がいいんじゃない？」「大丈夫なの？」と、声をかけても「もう終わったから」「大丈夫……」と、言っていたのです。生活の様子を見る限りでは、とても完遂しているとは思えませんでした。

そんなこんなで夏休みが徐々に過ぎていき、後半になる頃にはとうとう

「もう絵はいい。あきらめた」と、美術の宿題について投げやりなことを言い出したり、「作文は五分で書けるから、オレ」と、読書感想文について自信満々に言っていたのに「小西が本を持ってこないのが悪い！」と、やらないのを大人のせいにして、結局、作文にも手をつけていませんでした。完遂した数より、未完遂の宿題の数のほうが多かったです。

こんな様子で、なかなか宿題に取り組めない柴太です。昨年も同じようだったと思います。

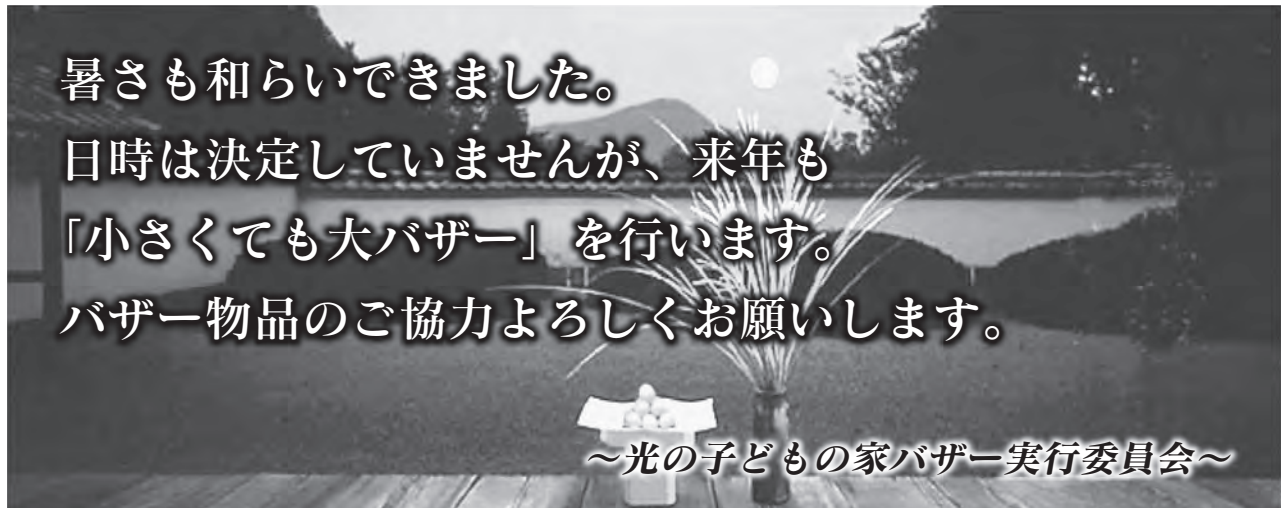
宿題に取り組めない子に取り組めるようにさせる、その気にさせる、というのは難しいです。

でも、これはきつと昨年も感じたのではないかな。デジャ・ヴが進歩がないということか、どちらなのでしょう。

夏休みの宿題というのは、いや、夏休みに限らず、宿題というのは、確かに子どもがやらなくてはいけないのが前提ですが、大人にとつての宿題にもなっていると思います。

子どもにやる気をつけて宿題をやるようにしてあげることや、できたら褒めて、さらなるやる気をつけさせたり、一人でできない子は手助けをして一緒にやること、そして一人でも大丈夫になれるように育てることが大切だと思います。

それが大人にとつての宿題なのだと思います。



暑さも和らいできました。
 日時は決定していませんが、来年も
 「小さくても大バザー」を行います。
 バザー物品のご協力よろしくお願いします。

～光の子どもの家バザー実行委員会～

日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

2017年5月～6月

2017年6月現在

幼児6名 小学生13名 中学生6名 高校生8名 計33名
 5月

- 1日 光の子どもの家後援会総会
- 2日 大利根東小学校との連絡会
- 4日 子ども祭り開催 学校の友人、卒園生、元職員、元実習生も参加
- 10日 民生児童委員・赤十字奉仕団の皆様との昼食会と役員会
- 12日 東大宮教会の久保島泰牧師による夕礼拝 感謝
- 14日 母の日会 日頃の感謝をこめて各家で夕食会
- 15日 五月生まれの誕生会
- 19日 東埼玉バプテスト教会の木田浩靖牧師による夕礼拝 感謝
- 26日 守谷教会の若月健吾牧師による職員礼拝 感謝
- 27日 大利根東小学校運動会
- 27日 第百十五回理事会、監事監査、評議委員会、夕食会
- 28日 東洋英和女学院大学より実習生
- 30日 通報避難訓練実施

6月

- 4日 原道小学校運動会
- 9日 東京家政大学より実習生
- 10日 「小さくても大バザー」開催 協力して下さった方々に感謝
- 11日 東大宮教会で花の日合同礼拝参加
- 11日 日本青少年音楽芸能協会によるジャグリング体験 感謝
- 15日 原道小学校との連絡会

- 18日 児童四名漢字検定受験
- 18日 父の日会 日頃の感謝をこめて各家で夕食会
- 20日 日本社会事業大学の藤岡孝志氏による施設内職員研修
- 20日 六月生まれの誕生会
- 23日 東埼玉バプテスト教会の木田浩靖牧師による夕礼拝 感謝
- 25日 日本青少年音楽芸能教会による楽器体験 感謝
- 28日 通報避難訓練実施
- 30日 守谷教会の若月健吾牧師による職員礼拝 感謝

<寄贈者各位>

喫茶店ハーモニー 坂本和加子 市川千代子 鈴木宏子
 メガネのアライ セカンドハーベストジャパン 田代都子
 加部芳子 坂ひろみ 白ゆり美容室 阿部 古河農友会
 島崎静子 しずくの会 柿沼正男 牛久 高橋 櫻井秀夫
 古川景子 神田美智子 織田祐治 蓮田健 江原ゆかり
 伊村幸子 佐野芳江 中村美佐子 長谷川智子 斉藤ちえこ
 糸井八重子 下川真由美 和泉みどり 関野正子 新井摂子
 宮崎晴子 大川誠子 小池みどり 竹内阿久利 杉山和俊
 五瀬伸子 小山田貴子 根岸亜麗朱 柿沼ルツ
 マルキチ物産 内藤芳江 相崎洋子 小林幸子 蓮田善英
 大野泰子 松本明子 長谷川一男 渋井みさ子 鈴木真理子
 鳥越宏子 関根由紀 他多数の皆様

<ボランティア各位>

向井進 丹羽健太郎 岡本有代 小豆沢 田村誠 山田智
 山田裕子 常松洋介 櫻井秀夫 他多数の皆様
 たくさんのご支援、バザー物品寄贈に感謝(黒川)

////// ———— 反 射 光 ———— =====

今夏、大雨に見舞われた方々に心よりお見舞い申し上げます▼「まり子さん、石がコロコロってなつてたよね」「僕、泳げたよね!」▼海水浴から帰ってくると、大きい子たちは日焼けの跡の痛みを叩き合うことで分かち合い(?)、小さい子たちは囁み合わないながらも「ね」等と相づちを打ち、体験を分かち合っていました▼久しぶりに私も家行事に参加させてもらい、楽しい思いをしてみました▼皆で同じ景色を見、同じ波に浮かんだり転がったりした経験は、きっとこの先、何かあったときに立ち戻る大切な景色になつていくでしょう▼その時、その場所に、一緒に居るといふだけで、どうか、得られないものを積み重ねることのありがたさを思います▼その大切さも、しっかりと意識していきたいと思ひます▼子ども時代のキラキラした思い出が、いつか彼らが大変な試練のときに支えてくれる力になることもあるでしょう▼今年も卒園生たちが帰ってきました▼彼らのキラキラした思い出も、少なからずここにあるのだろうと思ひます▼そのことも無性に嬉しく思ふ夏でした▼あれもこれも全てが皆様のお支えのお陰です▼改めて感謝申し上げます。ありがたうございます。

(岩崎)